

## 猪 2 子猪を負んだ狩人 = = = 猪・鹿・狸より

これは自分が七つ八つ時分のことだったと思う。その日は何かの用事で父が遠出した留守で、母と幼い同胞たちと一間へ塊り合って寝た。山村のことで、はや薄ら寒いほどの秋であった。ちょうど一眠りしたと思う時分、門の戸口をことごとと叩く音に目を醒ました。先に目を醒ましていた母が、まず声をかけたが、外には聞こえぬらしかった。二、三度続けて問い返すうち、ようやく隣村の狩人と判ってほっとした。用向きを訊くと、今しがた奥の窪でコボウ(子猪)を一つ撃ったのだが、家まで運ぶ間、ショイタを借りたいと言うのである。



ショイタ

母が土間の隅から取り出して、戸口を開けて渡してやると、そのまま急いで立ち去ったが、自分は思いがけぬ経験に興奮して容易に眠られなかった。そのうちまたもや戸口を叩く音がして狩人が帰って来た。今度はすぐ起き出して母を促して一緒に外へ出た。さすがに物珍しく心を惹かれたのである。夜目に瞭然と見えないが、暗がりにはショイタを負って立っている男の肩に、何やら突っ立っているのが、猪の肢でもあるのか、倒さにして結えつけてあるらしかった。

何でも宵待ちに行って、田の畔のボタに踞んでいたと言う。すると上の柴山からぼそりぼそりと降りて来るのが、夜空に透かして見ると、大小二つの紛れもない猪だった。

おおよそ狙いをつけて撃つと、つい目の前へ草を分けて転がってきたそうで、親猪の方はついに取り逃したと言う。そこは自分の家の田圃の傍らで、判然記憶にある場所だった。田の脇を道が通っていて、傍らに三つ又の杉の古木が立っていた。田植の折には、きまってその陰で昼飯を食べた所である。狩人は一通り話し終えると、新しく煙草を喫いつけて、幾度かショイタの礼を述べて、前の坂道を降りて行った。今考えると夢のような光景である。

その男は亀さとか言う名前で(亀造と言って)狩人仲間でも豪胆者だとは聞いていた。いつも相棒になる同じ村の若い狩人が、ひどい臆病者で、猪を見かけて遁げてばかりいるのに、この男のお陰で旨い目に遇うとも言うた。かつて村の老爺が、山田の猪小屋で鳴子の綱を引いていると、入口の筵を黙って持ち上げて、おっとう、今夜は俺が晩をせるぞえと言うて、ひどくびっくりさせたそうである。以前からの強い狩人は悉く死んでしまっ



山麓の猪小屋

あの男一人だとも言うた。

それほどの男でも、大切にしていた犬が、山で何者かに食い殺された時は、三日三晩も泣き通したそうである。赤毛のごく賢い犬で、主人が狩りに出ぬ日でも、一日に一度は必ず山に入って、兎か狸を捕ってきた。ある時三日も続けて姿を見せななんだ。そこで近所の者を頼んで、彼方此方捜すと、岩山の大きな石の陰に、咽喉を食い破られて死んでいたそうである。大方狸かなんぞの、劫を経たものの仕業であろう。あまりたくさんの獲物を捕った報いだろうとも言うた。このこと以来さずがの豪胆者も急に老い込んだと聞いたが、今でも多分生きているだろう、もう七十幾つの年配のはずである。